

北海道：先史時代から近世まで

北日本の先史時代の人々は、約 3 万年前に最初に移住した後、徐々に新しい生活様式を取り入れました。彼らの生活は、大型哺乳類を追って放浪するものから、集落を築き、狩猟、漁労、採集に従事するものへと変化しました。文化や社会も、定住化したライフスタイルに合わせて変化していきました。紀元前 13,000 年頃、土器が使われるようになり、縄文時代（紀元前 13,000 年～紀元前 300 年）が始まりました。初期の土器はシンプルで実用的なものでしたが、時間の経過とともに、より複雑なデザインが現れるようになりました。

集落が発展し人口が増加するにつれ、共同体はより広範な交易を始め、北海道の水路を利用して毛皮、道具、黒曜石などの原材料を交換していました。エビ縄文時代（紀元前 300 年-紀元後 600 年）までには、北海道は、農耕社会が金属加工に従事していた本州と交易網でつながっていました。本州からの鉄器や他の先進的な技術の入手により、続縄文時代の共同体は狩猟、漁労、農耕の技術を向上させることができました。

擦文時代（600 年-1200 年）には、サケは価値のある交易品となりました。擦文の人々は本州から鉄器、織物、土製の調理用かまどを取り入れました。また彼らは、オホーツク海、樺太、千島列島、北海道北部周辺のオホーツク人とも交流を持ちました。これらの人々はアザラ

シ、クジラ、およびその他の海棲哺乳類の狩猟を専門としていました。時間の経過とともに共通の文化が生まれ、一部の研究者は、オホーツク人と擦文の人々との交流がアイヌ文化の形成に役割を果たしたと考えています。